
増補版 精神科臨床とは何か
「私」のゆくえ

内海 健著

春秋社, 四六判 296 頁, 3,080 円, 2024 年 7 月刊
(伊敷病院) 神田橋條治

内海先生から、本が送られて来て、「初見参」です。初版は2005年の出版なのですね、きっと、「精神科臨床」についての把握感が確かになっての、講義録なのでしょう。ふと、内海先生は1955年生まれで、1936年生まれのボクとは、ほぼ20年の歳の開きだと気がつき、連想が走り出しました。この講義録

は先生が50歳の執筆で、一つの「完成」です。ボクは1984年に大学を去るに当たって、『精神科診断面接のコツ』を執筆しました。48歳、「理を諦め、技へ」の記念です。そして、ほぼ20年経って、69歳の先生は「増補版」を出され、87歳のボクが出会いました。

本書を手にしたら、2024年の、「補遺」をまず、お読みください。短いものですが、「理と論」を巡っての主張が、穏やかになっています。そして、第Ⅵ講「精神科面接の基礎」から、読み進められると、日常臨床における、導きが得られます。第Ⅰ講から第Ⅳ講までの論を、心静かに読めるようになります。精神科臨床を志す者にとっての、「必読の書」です。20年ほどの間に、先生の「論」への姿勢が、柔らかになっています。ふと我に返ると、ボクの「技」も、さらに「崩壊」し、もはや「形を留めなく」なっています。ボクの外来で、「陪席」される方々は、一体、何を心得帰られるか、分かりませんが、各人、その資質の延長上に、「誤解を含めた、学び」を得られ、「病む人の助けになる」、自分なりの「精神科臨床」を育てて行かれますようにと、願っています。「臨床・患者を大切にする」姿勢は同質なのに、そのありようは、両極端であることが、若い方々への示唆となりそうです。

ところで、論語に、「50にして天命を知り、……70にして心の欲する所に従えども、矩^{のり}をこえず」とあるそうです。孔子さまは、さすがですネ。80歳については、おことばがありません。寂しいです。
